

No. 4 : 台湾最大級の食品見本市

台湾は日本からの農林水産物・食品輸出額が第3位の主要市場で、日本食料店の店舗数も7千を超える。加えて昨年11月には、本県を含む5県に求められていた放射性物質検査などが撤廃され、輸出への追い風が吹く地である。

その台湾・台北で6月24日から27日にかけて開催された台湾最大級の国際総合食品見本市「FOOD TAIPEI 2026」。今年も本県ブースを設けた。

日本にも大雨をもたらした台風7号が南部で猛威を振るい、その影響か北部の台北でも激しい雷雨に見舞われ、私の傘では何の役にも立たないほどであったが、会場は30を超える国・地域から約1700の出展者と延べ4万人以上の来場者で活気に包まれた。

日本貿易振興機構（ジェトロ）のジャパンパビリオン内の本県ブースには、鹿沼市の「小林醸造」と矢板市の「壮関」の2社が参加。

小林醸造は大田原市の「池錦」の池島酒造を事業承継し、2024年に開業した県内で最も新しい酒蔵。オーダーメイド日本酒や酒造り体験を展開しながら、スパークリング日本酒「SUISUI」の英国輸出にも取り組む。今回は同商品のほか、純米吟醸、純米大吟醸をそろえ、販路開拓に挑んだ。積極的な情報収集に加え、日本酒や旅行事業を手がける事業者とのつながりも生まれるなど、手応えを感じる結果となった。



【「FOOD TAIPEI 2026」の本県ブースの様子
＝6月24日、台湾・台北市】

壮関は「茎わかめ」をはじめ、「れんこんチップ」や新商品「無限茎わかめ」など10種類以上の商品を紹介。一部の商品は英語版のパッケージも用意した。台湾、香港など既に海外で展開している商品も多いが、今回はさらなる販路拡大が目的だ。日本食品海外プロモーションセンター（JFOOD0）主催の料理実演会でも取り上げられ、バイヤー向けに商品の調理例も提案。多くの現地企業と商談の場を設け、複数の成約見込みにつなげるなど成果を上げた。

他にも、台湾では輸入規制撤廃などを背景に本県産イチゴの輸出額が大きく伸びた。本県への外国人宿泊者数が最も多いのも台湾であり、昨年12月には知事によるトップセールスも実施するなど、交流の積み重ねが続いている。

新たな商機が生まれる一方で、競争環境はさらに厳しくなることも予想される。今後も市場動向を注視しながら、県内事業者の挑戦と事業展開を後押ししていきたい。